

(00:00:00) **ゲスト：池端俊策①**

東海林：こんばんは。「カフェラテ」マスターの東海林桂です。

さらだ：ママのさらだたまこです。

東海林：日付は変わりまして4月18日になりました。「良い歯の日」。わかりやすいですね。

さらだ：4・1・8だから「良い歯」、はい。

東海林：日本歯科医師会が制定しております。で、「良い歯の日」だって言うけれど、じゃあ11月8日はどうなんだ、「いい歯」だろという…。

さらだ：ああ、でも前に言ったじゃないですか？ 1年に2回、春と秋、歯のことに気を付けようと。

東海林：そうです。それで、これも「いい歯の日」だぞと。「いい歯の日」。

さらだ：え？ うん。

東海林：だから、それも日本歯科医師会が制定してます。

さらだ：でもやっぱり3か月に1回くらいは歯医者さんに行って、きちっとメンテナンスしたほうがいい。

東海林：年に1回は必ず歯石を取ったりなんかすると良いつて…。

さらだ：1年に1回じゃ足りない。私、3か月に1回来ないと怒られる。歯並び悪いから（笑）。

東海林：さて、今夜のお客様は脚本家で映画監督の池端俊策さん。

さらだ：はい。

東海林：あの今村昌平監督作品『復讐するは我にあり』『檜山節考』と書き、1984年には『私を深く埋めて』『羽田浦地図』『危険な年ごろ』で向田邦子賞を受賞。さらに2009年、芸術選奨の新人賞ならびに紫綬褒章。今年1月にはNHKで『足尾から来た女』が放送と。

さらだ：業界では、賞獲り王ってことですよ。

東海林：大御所？

さらだ：はい。大御所でございますね。

東海林：ちょっと緊張しますね。

さらだ：はい、大変緊張しております。

東海林：それでは、まいりましょう。

さらだ：はい。今夜も午前4時まで、ごゆっくりお付き合いください。

*

脚本家を志すまでのジグザグ

東海林：今夜のお客様は脚本家で映画監督の池端俊策さんです。初めまして。

池端：初めまして。よろしく申し上げます。

さらだ：この前、中園ミホさんが向田邦子賞をお獲りになったときに、審査員をされてたんですね。富川元文先生と一緒に審査員席にいらっしゃって。私、ごあいさつさせていただいたりしています。

東海林：あら？ ということは、向田邦子賞を獲りたかったら、池端さんに「よろしく」みたいな。

池端：僕だけじゃないですよ。ほかに、怖いレディーがいますから。

さらだ：レディー？

池端：大石さん、井上さん。

東海林：ああ。大石静さんと、

さらだ：井上由美子さん。

東海林：怖いレディーですね？ じゃあ、大石さんにも手をまわして…。

さらだ：でも私たち、脚本家じゃないのよ。ドラマ書いてないから。

東海林：あ、そっか。

さらだ：お呼びでないっていう…。

東海林：そうですよね。で今回、池端さんの資料を見たんですが、一番最初に書かれていたのが1971年、昭和46年の作品。フジテレビの『みなしごハッチ』って書いてあったんですよ。

さらだ：デビュー作ですか？

池端：いや学生の頃のアルバイトで。それは僕のお師匠さんがいらして、そこにいろんな弟子がいて、その中の1人だったんです。兄弟子が『みなしごハッチ』を書いてまして、「君もバイトで書かない？」って言われて…。

東海林：え？

さらだ：タツノコプロダクション？ アニメの老舗ですよ。

池端：そうです、そうです。で、何本かバイトで。

東海林：バイトで脚本を書いていたんですか？

池端：22, 3の頃。

東海林：じゃ、それがデビュー作っていうことになっちゃうんですか？

池端：自分の感覚ではアルバイトだから、デビューって感覚はないです。でも一応タイトルには出てるんです。

さらだ：池端俊策と？

池端：そうです、そうです。

東海林：その『みなしごハッチ』を書くきっかけというのは、バイトの感覚で、やったのが最初のだったんですね。

池端：そうです、そうです。

東海林：それを書けるということは、シナリオの勉強をなさってたと？

池端：ええ。僕は広島県の呉の出身ですけど、映画が好きで、テレビが好きでね。それに関わる仕事がやりたいと思って…。

東海林：それは何歳ぐらいの頃に？

池端：高校生。芝居をやってたんですよ。

(00:05:00)

さらだ：高校生の頃？ 演劇？

池端：高校の演劇部にいまして。もう、そういうことが好きだったんですね。とにかく東京へ出るしかない、広島にいたんじゃ、どうしようもないと。なので、東京へ出るためには、とにかく大学は東京の大学へ行かないと話にならない。ですけど、目的がそっちですから、だから、上京したらすぐシナリオ研究所って所に入ったんです。

東海林：あ、そうなんですか？

さらだ：そのシナリオ研究所っていうのは、今のシナリオ作家協会と関係はあるんですか？

池端：シナリオ作家協会が「シナリオ講座」というのをやってますが、その前身になるもので、青山のほうに学校があったんですよ。

さらだ：その頃、新藤兼人さんが教えてらしたとか？

池端：そうそう、そうそう。新藤さん。

さらだ：それがまさに、今のシナリオ作家協会の講座の本当の前身で？

池端：前身。本当に前身だったんですよ。僕はそこに20歳のときに行きましたから。そこで「いろは」を教わったの。

東海林：最初の先生はどなただったんですか？

池端：馬場当（ばば・まさる）っていう人と、それから深作欣二さん。

さらだ：おお。

池端：深作欣二さんは不遇の時代ですよ。

さらだ：あ、そうなんですか？

池端：ええ、ギャングものをやってて。当時の東映は任侠路線だったからギャングはダメなんですよ。

さらだ：やっぱり、義理と人情の唐獅子牡丹という…。

池端：そうそう。でも深作さんはギャングでハードボイルド路線。

東海林：ギャングとハードボイルド、はい。

池端：ジメっとした人情ものがダメだったんでしょうね。で、仕事がないもんで、シナリオ研究所に教えに来られてたの。僕、その時、講師でつきたいなと思ったのは倉本さんだったの。

さらだ：倉本聰さんもいらしたんですか？

池端：当時、飛ぶ鳥を落とす勢いで…。

さらだ：ニッポン放送をやめて、シナリオライターとして…。

池端：そうです、そうです。倉本聰さんのお名前はよく知ってて、「どうも良さそうだな」。あと浦山桐郎さんが『私が棄てた女』を撮った頃で、これまた僕が好きな監督さんだったんですよ。だからあまり仕事をしてらっしゃらない監督さんが、まあシナリオ教えてやろうかという感じでいらしてたんで、そういうクラスは結構あったんです。でもみんな満席で。その頃、金子成人さんあたりが倉本さんのゼミに入ってぴったりついてたんじゃないかな？

ともかくいっぱい、僕が入ろうと思ったらすごい人気で、もう締め切りだったんです。

東海林：そうなんですか？ ということは、その頃からやっぱりシナリオ作家の勉強をする人というのは結構、どんどん、どんどん東京へ集まって？

池端：いや、多かったです。

東海林：すごかったんですね？

池端：多かったです。

さらだ：だけど、どっちかというとなシナリオ研究所って映画のシナリオですよ？

池端：なんですけれども、テレビもすごい勢いでドラマが伸びて『若者たち』が出てたり、『三匹の侍』が出てきたり…。

東海林：『三匹の侍』、懐かしいですね？

池端：その時代ですよ。山内久さんは『若者たち』を書いている…。

東海林：ええ。

池端：だから、山内さんのゼミも人気があったですよ。

東海林：「♪君の行く道は～」ですよ？

池端：そうです、そうです。その時代ですよ。

東海林：東京でシナリオの勉強をしたいなと思ったきっかけは何だったんですか？ 高校は演劇部だそうですが、例えばもっと前の中学のときに、なんかの映画を見ちゃったとか…。

池端：親父が映画好きでね。小津安二郎ファン、それにチャップリンのファンなんですよ。

さらだ：ああ。

池端：だからチャップリンの映画がくると必ず連れて行かれ、小津さんの映画っていうと…。僕は小学校の2, 3年だったかな、『東京物語』を見に行きました。

東海林：お父さんの映画好きが非常に影響を与えたと？

池端：そうです。

東海林：それで映画監督、それともシナリオ、どっちをめざしましたか？

池端：漠然とした。

さらだ：とにかく、何か映画関係の仕事にと…。

池端：なんか、映像世界に憧れたんですね。演劇はやってましたけど演劇じゃないな、やっぱり映像だなんていう…。それはどうも子どもの頃、親父が僕にたたき込んだんですね。

東海林：そうでしたか。

池端：で、映画が終わると親父は解説するわけですよ。家に帰って来て「あのシーンは、こういう意味なんだ」って。僕はまだ小学校2，3年でしょ、「あ、そうか」と思っただけですけど、すごく記憶に残ってます。

東海林：『東京物語』ですか。

池端：これは僕が親父の赴任地の舞鶴で見たんですよ。小学校2年だったかな？ 舞台が尾道でしょ？ 広島県なんですよ。だから、海が出ると呉の海を思い出すね、子どもだったんだけど。

さらだ：近いなって？

池端：原節子がラスト、汽車に乗って尾道から東京へ帰っていくんですが、それを見送るっていう…。非常に印象に残ってます。あのゆったりとしたテンポがまた瀬戸内海風なんです。

東海林：はい。

池端：僕、東京へ出てきたとき、「ずいぶんのんびりした喋り方しますね」って言われていまも尾を引いてますけど。どうもあの風景と関係あるみたいで…。

さらだ：なるほど。東京はみんな、ちょっとせっかちですからね。

池端：早いんです。

さらだ：なんか、けんかしてるみたいですよ？

池端：ええ。だから、出てきた当初は「ああ、早いなあ」と思って。だからみんなに「お前、あっちのほうだろ？」って当てられちゃうんです（笑）。

さらだ：ああ、のんびりした喋り方で…。

池端：そうそう。広島弁も残ってましたからね。

東海林：広島弁っていうと、ヤクザの抗争映画を思い浮かべちゃうんですけど。

さらだ：そういうイメージはありますけどね。

池端：そう。

東海林：そうですよね。

*

東京でのジグザグはつづく

池端：僕、東京へ出てきてシナリオ研究所へ入ったら、行きたいゼミがみんな満席で塞がってた。で、「どこが残ってるんですか？」って事務局の人に言ったら

「深作さんが残ってますが」って。これガラガラなんだよね。驚きました。僕は深作さんの『狼と豚と人間』っていう映画がすごく印象に残ってて。「あ、深作さんなら行ってみよう」と思ったんです。そしたら、そこでは馬場当さんが一緒に教えてらして、というようにところから僕は勉強を始めたんです。僕、深作さん好きでね。くっついて歩いてた（笑）。

さらだ：人間的にも好き？

池端：ああ。

さらだ：どんな感じですか？

池端：ああいうハードボイルド・タッチの映画を撮られてたんだけど、僕には「漱石を読め」って言うんだよ。

さらだ：ほう、夏目漱石を読みなさいと？

池端：とにかく本を読みなさいって。君は映画が好きだろうから、黙ってても見るだろう。だから、とにかく本を読めって。そうじゃないと、脚本は書けないよって。そういう、非常に言いそうもないことを言う（笑）。そこが面白いんですよ。「ああ、深作さん、そういうことを言うんだあ」と思って。僕も本は嫌いじゃないので、「それは良いな」と思って、くっついて歩いてたんです。そしたら、「最近、何を読んでる？」みたいな話をずっとされるんですよ。

東海林：へえ。やっぱり漱石は読まれたんですか？

池端：だから、しょうがないから（笑）。教科書で断片を読んだぐらいですから。

東海林：『こゝろ』とかね？

(00:15:02)

池端：けどちゃんと読まなきゃいかんなと思って。小学校6年のときだったか、たまたま親父が最初に僕に「本を読め」って言って買ってきたのが角川文庫。角川文庫っていうのが出だしてて、『吾輩は猫である』だった。

さらだ：なるほど。

池端：最初に親から渡された本が『吾輩は猫である』だったんですよ。でもあの当時の日本語っていうのはやっぱり難しいのね。だけど一所懸命、前・後編2巻読み通したんですよ、猫が死ぬまで。

東海林：金魚鉢で死んじゃうんですよ？

池端：そうそう。

東海林：なんだか、悲しいですよ。

池端：悲しい結末。悲しくてね？

東海林：なんで、金魚鉢に落ちちゃうんだろうな、みたいな。

池端：そうそう。

東海林：爪を立ててもね、登れないとかって死んじゃうんですよ？

池端：そうそう。でも前半はすごくおもしろくて面白くてね、ユーモアがあって。

それがとても肌に合ったんですよ。だから、「あ、文学ってのは面白いものなんだ」と思って。それからちよつとずつ文学と言われるものを読んではいたんですね。だから、それで深作さんが「お前、漱石を全部読め」って…。

さらだ：全部？

池端：ええ、ええ。そう言われて。

東海林：大変ですね？

池端：大変ですよ。読まなかったです（笑）。

さらだ：脚本の書き方なんかも教えてくださいませんか？

池端：細かいことは言いませんで、ストーリーを書くと、「それは君、つまらんよ」っていう、非常にバサッとやられて。で、どっちかという雑談が多いんです。「最近、こういうことを考えてる」みたいなことをおっしゃって、それを聞いて「はあ、はあ」って。でも僕は生意気だったから、深作さんの映画はかなり見てたもんで、僕が「どうして、あそこはああやるんですか？僕はあそこあんまり好きじゃないんです」とか言うと、ものすごく真面目に怒られるんです。「お前、生意気だ」って。

東海林：生意気だったんですか？

池端：「お前ね、俺のところにストーリーを全然書いてこないじゃないか。自分で作らないで人の作ったものの批判だけしてるって、そういうのは最低だ」って言われて。半年間くっついて歩いてたんですけど、「お前、書いてこないんだったら破門だ」って。うわー。「もう付き合わないから」って言われて、こっちもカチーンときて、「ああ、いいです」って。

東海林：お？

*

馬場当さんという“師匠”に拾われる形で…

池端：そしたら、馬場当さんという人が優しい人で、「お前、遊びに来い」ってその頃言われて。それで馬場さんが住まわれてる鶴見に通うようになって。そのシナリオ研究所っていう所に1年間通ったんですけど、後半はほとんど鶴見に行って馬場さんにくっついて歩いてた。

さらだ：個人的なお師匠関係みたいな感じ？

池端：そうです、そうです。

さらだ：でも深作さんのとき、「書いてこない」って言われたら「じゃあ書きます」って全然思わなかったんですか？

池端：書けないんですもん。

東海林：書けない？

東海林：シナリオ研究所に入ったにもかかわらず、まだ？ シナリオ書いて出したっていうことはなかったんですか？

池端：だって20歳ですよ。200字詰めペラで200枚書けて言われても書けないですよ、そりゃあストーリーを一所懸命に作って出すんですけど、「こんなストーリー、商売にならんよ」って言われて。いまから考えると、自分が妄想している物語はとても狭い世界の中のことで広がりが無い、やっぱり単なる妄想ですね。だから門前払いになったんですね。

(00:20:00)

ストーリーを作るのにも四苦八苦して、脚本にまでいかないんですよ。

さらだ：あ、そういうことか。

池端：ただ、短い10枚や20枚の課題を出されて、ディテールをちょっとずつ書くという脚本のセリフの勉強はやりました。そういうのは最初の半年でしました。けどあんまり役に立たない。やっぱり「ストーリーが作れなきゃしょうがねえなあ」っていうことでしたね。

で深作さんには突き放されたけど、馬場さんは「まあ、まだお前は学生だしな、ぶらぶらしてるうちになんとかなるだろ」と。それで短い物を、ストーリーを書いて出したらそれを認めてくれたんですよ、馬場さんが。「ちょっと面白いよ、お前」「ちょっとですか？」「うん、ちょっとだけ面白い」って(笑)。馬場さんはその頃『若者たち』とか『三匹の侍』を書いてらしたんですよ。

映画の人がテレビの脚本を書くというのは、当時はなかなか勇気が要ったんじゃないかなと思うんだよね。映画の人はテレビを「敵だ」っていうふうに見てたからね。

東海林：俳優さんもなかなか出てくれなかったんですよ？

池端：そうです、そうです。そういう時代ですからね。だから松竹で活躍してた山内久さんとか馬場さんが、フジテレビの連続ドラマを書くっていうのはやっぱり勇気が要ったんだと思う。でも、僕はそこが好きだった。テレビが好きだったから。大河ドラマ大好き人間で、『太閤記』なんかも夢中で見ましたからね。ですから、僕は両方OKだったんですよ。

東海林：映画もテレビも？

池端：映画もテレビも。だから、その両方をやってらっしゃるっていうので、僕は「ああ、いいな」と思って。それで馬場さんにくっついて歩いてたんですよ。そしたら「お前ちょっと手伝うか？」と言われて、『三匹の侍』の末期頃と『若者たち』の第何クールかをやったんですよ。終わりの方を僕は手伝いました。

東海林：じゃあ、それがシナリオの、

さらだ：ちゃんと形にする作業？

池端：いや部分だけ。「このシーンを書け」という…。

東海林：なるほど。

池端：「こうこう、こういう話だから真ん中らへんの、こいつとこいつのこういうけんかのシーンを書いてみろ」みたいな…。

東海林：ああ。パート？

池端：パート、パートで書かされるんですよ。何人かそういう手伝いをする若い人がいて、もう締め切り間際になると3人か4人で旅館にこもってワーッと、その部分部分を書いて、馬場さんが継ぎ足して1本作っちゃうんですよ。3日ぐらいで作っちゃう。

東海林：え？ 1時間ものを3日ぐらいで？

池端：そう、3日ぐらいで。当時は30分ものもありましたから、そういう番組もそういう形でやって。僕は学校へも行かないで、そのまま旅館にこもって、徹夜でそういうことをやらされてました。それは面白かった。

東海林：あ、逆にね？

池端：ええ。そこではセリフの勉強をしましたね。「これは説明セリフだ。こういうことを書いてはいけないんだ」「もっと感覚的な、“痛い”とか“かゆい”とか、そういう感覚を書け」っていう教えですね。

東海林：ということは、実戦でどんどん鍛えられた？

池端：そうです、そうです。だから、馬場さんには、本当の意味での「いろは」を教わった。

さらだ：手取り足取り教えてくれた先生。

池端：そうです、そうです。

東海林：そうすると、そこから脚本家への道がスタートして？

池端：そうですね。で、さっき言いましたように、

東海林：『みなしごハッチ』の場合も？

池端：『みなしごハッチ』は、そこで一緒にやった兄貴分がいて…。

さらだ：ああ、兄弟子さん？

池端：その人がタツノコプロのものを結構書いていたんですよ。それで書き手が足りないから、「君、バイトで書かないか」って22、3の俺が入って、それで「じゃあ、やります」って。アニメはやったことなかったけど、やったんですね。このアニメは意外と簡単でした。つまり、それまでが難しいことをやらされていたんですよ。

さらだ：馬場先生に？

池端：うん。『若者たち』なんて難しかったですよ。若者の生き方を問いかけるドラマでしたからね。いまの社会というものとどう付き合っていくかという非常に難しい物語でしたから。その点、『みなしごハッチ』は童話で、夢のような話ですから楽しくて楽だったんですよ。

さらだ:でも、最初に深作欣二さんについてた時期は、お話すらまだできなくて、それがやってるうちに『みなしごハッチ』をやるように…。あれ1話が30分でしたっけ？

池端: 僕ちょっと忘れちゃった (笑)。

さらだ:一応、ちゃんと起承転結、1本まるまる任されて？

池端: そうです、そうです。

さらだ: 大丈夫だったんですか？

池端: 最初の1本目ぐらいは先輩と名前並べてやらせてもらって、それからは「1人でやれよ」と言われて全部1人で。でも全部で4本ぐらいしかやってないんじゃないかな？

東海林: でも、実質的には独り立ちのデビュー作っていうのが『みなしごハッチ』？

池端: そうなんですよね。

さらだ: 脚本家としてタツノコプロさんに抱えられそうにならなかったですか？ (00:26:33)。

池端: いや、大学を卒業たものの行く所がなかった。その縁でタツノコに入れてもらえませんかって言ったら、いいよって…。

東海林: 就職しちゃったわけですね？

池端: その代わり、「脚本料は出ないよ」っていうことに…。

東海林・さらだ: ああ。

池端: だから社員としては本を書かさないという建前として。で、僕は演出部に入りましたから脚本は外の人に書いていただいて、僕は演出をするというのが建前って感じですね。で、『いなかっぺ大将』などをやりました。

さらだ: あ、実際に製作に関わって？

池端: ええ、自分で編集して演出して。

東海林: 監督業ですよ？

池端: やりました、やりました。2本。半年在籍して。

東海林: 半年でやめちゃったんですか？

池端: 半年でやめちゃった。

東海林: あら、なんでです？

池端: いやあアニメって撮影も部屋の中でしょ。演出っていても絵を見てキャラを決めていったりするのは全部室内の作業でしょ。息苦しくなっちゃったんだよね。

さらだ: 性に合ってなかった？

池端: これを一生やるのかと思うと、やっぱり外に出てね…。学生の頃、テレビの助手をやったわけだから、シナハンと称してあっちこっち歩き回ったりとか、

外での実写の楽しさを少し知ってたから、これはちょっと自分には不向きだなという気が…。

さらだ：逆にアニメのそういう環境が大好きという方々がとどまることもあるしね。「自分はここだ」って言って…。

池端：あります、あります。世界としては面白いんです。そうそう、それもわかるんですよ。だからすごく悩んだんですけど、早く結論を出した方がいいなと思って。ちょうどその頃馬場さんからは「お前、演出家になるんか?」「脚本はもうやめたんか?」っていう感じで言われ、「帰ってこいや」みたいな感じでしたから。それで…。

東海林：外の世界のほうがいいと？

池端：タツノコプロの偉い人に、「外の世界の脚本に戻ろうと思います」って言ったら「ああ、いいよ」って、あっさり。

東海林：引き留めてくれなかった。

池端：そう。俺はやっぱ才能がないんだと思ってね。それで納得してやめました。

東海林：このあたりで音楽に行きましょう。お好きな曲というと？

池端：最近よく夜寝る前に聞いているのが、トニー・ベネットの「デュエット」っていう、他の歌手さんと一緒に歌っている良いCDがあるんですが、
(00:30:05)

その中にアレサ・フランクリンっていう人と歌っている「How Do You Keep the Music Playing」っていう曲がありまして、これ、好きなんですよ。

東海林：池端さんお勧めの名曲ということですね？

池端：はい。

東海林：寝る前に聞くと良いんですね？

池端：良いですね。

さらだ：ほう。私たちも聞いてみよう、寝る前に。

東海林：それではトニー・ベネットとアレサ・フランクリンのデュエットです。「How Do You Keep the Music Playing」。

音楽再生 (00:30:39)

音楽再生終了 (00:35:55)

東海林：はい、トニー・ベネットとアレサ・フランクリンで「How Do You Keep the Music Playing」ということで、なかなかおしゃれな曲でした。

さらだ：おしゃれな曲ですね、はい。

*

思えば面白い20代を過ごした

東海林：さて、タツノコプロを半年でやめられて…。

さらだ：また馬場先生のところに戻って脚本家を？

池端：そうです。

さらだ：やっぱり、ちゃんとやろうと？

池端：ちゃんとやろうと。就職はしないと腹をくくって始めたんですけれども、なかなかうまくいきませんでね。でもまあ時々、東海テレビがやってる長い昼帯ドラマがありますね。

東海林：ありますね。

池端：ああいうのを馬場さんがおやりになって、それを独立して何本か担当して書いたりとか。20代はそういうことをちよつとずつやりましたね。

さらだ：東海テレビのお昼って、どちらかというともロドラマっぽいんですね？

池端：他にもいろいろやりましたよ。『中山道いそぎ旅』だったかな。とにかく股旅ものとか『かんざしおえん』なんて女性が活躍するような時代劇とか…。

さらだ：時代劇、かんざしが武器なんですか？

池端：夜の単発ものであるでしょ、1回完結の。フィルムで撮られてる、そういうテレビ映画。

東海林：テレビ映画！

さらだ：昔、テレビ映画って言ってましたね？

池端：そうです、そうです。フィルムのね。そういうものを独立して書いたり。

東海林：昔、ドラマはフィルムで撮ってましたもんね？

池端：そうなんですよ。局製作のものはビデオで収録してましたけど、大映テレビ室とか東映とか製作会社が作るものは…。

東海林：『ザ・ガードマン』や『キーハンター』。

池端：そうです、そうです。

さらだ：刑事ものとか時代劇はどっちかというともフィルムで、ホームドラマがどっちかっていうともビデオで…。

池端：そうです、そうです。フィルムが多かったんですね。だから20代はそういうことでぐちゃぐちゃと…。

さらだ：ジャンルを選ばなければ仕事のオファーはあったんですね？

池端：そう、細々とやっておりました（笑）。

さらだ：切れ目なくというか…。

池端：切れ目はずいぶんありましたよね。だから、食えないからなんか仕事をやんなきゃいけないかなとか思ってバイトをしたり…。

さらだ：食べられなかったんですか？

池端：厳しかったですね。

東海林：何をなさいました、そういう時？

池端：英会話の教材の営業とか。

東海林：え？

さらだ：買ってくださって？

池端：そうです。営業しているいろんな人に会うじゃないですか。結構変なお客さんがいたりするんですよね。

東海林：変な人？

池端：売れば言うことはないんですけど、ふつう会えないような変な人に会えるのも面白かったんですよ。でもほとんど売れなくて。「ああ、やっぱりセールスマンは向いてないな」と思ったりしましたけどね。それに、ずいぶんあやしいバイトもしました。

東海林：あやしいバイト？

さらだ：でも、なんかあやしい仕事は後々役に立ちますよね？

池端：やっぱり、あやしいほど役に立ちますね。

さらだ：そんなシチュエーション、なかなか取材できないですね。

池端：そうです、そうです。だから、あやしい人たちとも付き合いましたしね。

(00:40:05)

生活は大変でしたけど、面白い20代でしたね。

*

今村昌平の映画学校から道が開ける

池端：20代の終わり頃、馬場さんと僕は離れて1人でやってたんです。そしたら、馬場さんから「お前、学校の先生に興味ねえか？」って呼ばれて、何ですかって言ったら「横浜で今村昌平が映画学校をやる」って。松竹では馬場さんが先輩で、今村さんが後輩なんですよ。で、今平さんが学校を作るんでスタッフが足りないから、お前行ってみるかって言われて。「給料くれるんですかね？」「わかんないけど、やってみなきゃあな」と。まだできたばかりでしたから。で、今村さんに会いに横浜まで行ったんですよ。そしたら「君、本を読むんだってな」って言うから、「はい、本は読みます」「じゃあ、学生に本を読ませてくれ。今の若いやつは本を読まないからダメだ。読書係をやれ」って言われたんです。

東海林：読書係？

さらだ：本って脚本の本じゃなくて、いわゆる読書の？

池端：読書の。

さらだ：夏目漱石を読みなさいとか、そういう…。

池端：そうそう。だから学生が読むべき100冊の本とかを僕が選んで、刷り物にして渡したりするわけです。そういうことを今村さんに命じられてやったんです。で初対面のとき、「給料もらえますか」ってこの大監督に聞いたら、「うん、やるやる」って言うんですよ。

東海林：軽い返事だったんですか？

池端：軽い返事で「うん、やるやる」って言うんで、「ああ、じゃあやります」なんて言って（笑）。それが28、9のときですよ。学生の読書係の給料は大した額じゃないですよ。だけど毎月もらえるっていうのはいいなあと。

さらだ：アパート代とか？

東海林：10万ぐらいはもらったんですか？

池端：そんなにはもらわないですよ。アパート代ぐらいなもんですよ。それで、今村さんが映画を作る予定があるというんで、それを馬場さんが書くのだと。「じゃお前、手伝え」ということになって『復讐するは我にあり』に。

さらだ：ここでつながってくるんですね。

東海林：すごい、いきなり『復讐するは我にあり』だ、すごい作品がどーんとききましたね。

池端：そうです、そうです。ですけどなかなかスタートしなくて。著作権をめぐってずいぶんもめたんです。

東海林：ああ、そうなんですか？

池端：深作さんが撮るとか、いろいろもめましてね。だから、本当に今村さんが撮るかどうかが決まらなかったんです。だから手伝えって言われても、学校をやってるほうが多くて、なかなか脚本には行かなかったんですけど。でも2年ぐらい経ったかな。

さらだ：取り掛かれるまで、そんなに時間が経ったんですか？

池端：経ったんです。2年ぐらいしていよいよやるということになった。

*

『復讐するは我にあり』の脚本執筆

池端：まず、今村さんと馬場さんと僕と3人が旅館にこもって構成を作って。それで、さあ書こうと。誰が書くとなったら、結局僕がトップバッターで書かされるわけです。

東海林：第1稿を。

池端：そうそう。馬場さんとは長い間そういうやり方でしてますから。まずお前が書けと。それで書いた順番に渡していくんです。それをすぐ馬場さんが直していく。そういう作業をやったんですよね。これは時間がかかった。

さらだ：それで、ある段階になったら今村監督もいろいろ言ってくる？

池端：いや、これは馬場さんと今村さんとの関係の中での話し合いだったんだらうけど、「口を出さない」という約束ができていたらしい。

さらだ：あ、なるほど。

東海林：脚本には口は出さない、演出にも口は出さない？

池端：はい。演出には口は出せませんよ。大監督ですから。

(00:45:03)

東海林：大監督ですもんね。

池端：これまでだと、大監督は脚本にも関わってこられますから。馬場さんはそれを嫌ったんですね。

東海林：ああ。

池端：僕の知らないところでそういう話があったらしくて、今村さんは口を出さない。だから、お前と俺とで書こうという話が最初にあって。で、今までどおりの形の頃にやっていた作業を復活させて、僕が書いて馬場さんが直してということはずっとやったのね。

で、半分ぐらい書いたときに、今村さんの映画学校ではなかなか生徒が集まらなくて、日大の芸術学部を落っこちたやつを引っ張ってくるということをやってて…。

東海林：はい？

池端：「おかしなことをやるなあ、大監督のやるこっちゃないな」と僕は思っていました。日大に(00:46:08)行きましたね。3月かな？入試が終わると学生が出てくるじゃないですか？それを映画学校の職員がおいでおいでと呼び込んで、麻雀屋の2階かなんかに…。

東海林：学校案内状を作ったんでしょ？

池端：そうそう。対策本部みたいな。

東海林：「今村昌平映画学校へようこそ」みたいな？

池端：そうそう、そうそう。

さらだ：チー、ポン言いながら？

池端：そこを落ちたらうちへおいでって。こっちのほうがよっぽどいいからみたいなことを言って…。

東海林：日芸落ちたら今村昌平映画学校へ。

さらだ：「すぐ実戦」みたいな、「すぐ映画がやれますよ」みたいな。

池端：そうそう。それを麻雀屋ていうのが、おかしいよね（笑）。

さらだ：リーチかけてる、生徒に（笑）。

池端：そうそう。雀卓を前にして、今村さんが「君、うちへいらっしやい」なんてやってるわけですよ。

そんなことなど知らない僕は、箱根で書いていたんですけど、第1稿が半分ぐらいできたところで、そこに持って行って読んでもらったんですよ。

東海林：半分ぐらいできたところを今村さんが？

さらだ：麻雀屋へ持って行くんだ、すごいね（笑）。

池端：それで今村さんが読んで、うーんって。そのときは馬場さんがたまたまいなくて、僕が運んでいったんだ。そしたら「池端君、なかなか良いからこの調子で書いてくれ」ってえらく励まされて、こっちも意を強くして。原作からどんどん離れていくし、今村さんは調査魔だからあちこち調べ歩いてて、こういう資料がある、こういう資料があるって渡されるわけですよ。それを全部入れ込んで書くわけですよ。膨らんでいくわけね。「これで本当に終わりまでいくかしら」みたいな不安になるわけ。でも、真ん中までとにかく書いたから、そろそろ見せてくれてって言われて持って行ったんですよ。そしたら、「これでいい」って。それはね、大巨匠が言うんだから間違いないみたいな。これで最後までやってくださいって言われて、続けて書いたんですけど。それが、映画学校に行って3年目ぐらいですかね。

東海林：それで結局、その第1稿を全部あげたわけですか？

池端：そうです、そうです。

さらだ：でも、最初そうやって励まされて、ふつうなら新人が持っていくと「ダメだ」ってよくあるパターンじゃないですか？ それで打ちひしがれて二度と浮上しないと。しかし池端さんの場合はちゃんと才能があって、お書きになっていると…。

池端：才能があったかどうかはわかりませんが…。

さらだ：でもそういう“打てば響く”関係になれたから、それはよかった。

池端：そうそう。よかった。その後のことも考えると、今村さんと僕は相性が良かったんだと思う。助監督やれと言われましたからね。

さらだ：あ、その『復讐するは我にあり』でいきなり助監督？

池端：まあ諸々あって、やりませんでしたけど。

東海林：また、演出にいつちゃう感じが到来して…。

池端：ですけど、『復讐するは我にあり』のときはそういう感じで、初めて大監督とサシで2人つきり…。

さらだ：すごいですね、まだ20代で。

池端：それは箱根で2人つきりで。馬場さんは無類の競輪好きなんで、小田原で

競輪をやっていると、箱根から下りていくんですよ。

(00:50:05)

東海林：そうですね、小田原競輪ね。

池端：そう。小田原競輪行って、

東海林：小田原やってなくても、ちょっと足を伸ばして平塚へ行っちゃうもん。

池端：平塚行っちゃったこともあります (笑)。

さらだ：なるほどね。

池端：鶴見は花月園があるし。あそこらへんは、ギャンブルやる人間はもってこないんだよ。

東海林：逆に伊東にもありますからね。

池端：あります、あります。だからいなくなっちゃうんですよ、スーッと。

東海林：その、いなくなっちゃった時はもうずっと1人で書かされて？

池端：お前書いてろって書かされてた。そしたら、たまたま今村さんが山に上ってきて、「なんだ、1人でやってんのか」って2人きりに…。

東海林：よかったですね、ちゃんと真面目にやっています。

池端：「馬場さん、どこ行ったんだ」って言うから、「いや、競輪へ」って言ったら、「そうか、しょうがねえなあ」って。構成をやっていたんだけど、「こういう構成を作りました」って、馬場さんと一緒にやったのを見せるんです。そしたら、こうやって見て、「いや、こうしないほうがいい。ちょっと今晚やろう」なんて言って、冬に2人で2晩くらいやった記憶がありますけど。「あ、今村さんって、こうやって構成を作るんだ」っていうのは勉強になりました。

東海林：それはいいですね。

さらだ：本当に実戦、実戦で良い師匠に恵まれたわけですね。

池端：そうですね。僕は運が良かった。

東海林：ということで、『復讐するは我にあり』がきたところで、次は『檜山節考』に行きたいところですが、その話は来週続けようと思います。今村さんの話も面白かったです。また来週もこの続きをぜひともお願いいたします。

池端：はい。

東海林：はい。今夜のお客様は脚本家で映画監督の池端俊策さんでした。どうも、ありがとうございました。

池端：どうも、ありがとうございました。

さらだ：ありがとうございました。

東海林：続いては、「月刊ドラマ」2014年5月号」発売のお知らせでございます。

さらだ：今回の大目玉、特集記事は「第42回 創作ラジオドラマ大賞・最終審査結果発表」が詳しく載っております。

東海林：ほう。

さらだ：これは、われらが一般社団法人・日本放送作家協会が主催して、長い歴史を誇るラジオドラマの作家の登竜門として知られていますね。最終審査の直後に行われた審査員の座談会と、今回受賞された佳作三氏の受賞の言葉、佳作第一席の石原理恵子さんの「夕暮れ迷子」の脚本を掲載。石原理恵子さんという名前を聞いたらピンとくるでしょ？

東海林：うん。なんか記憶にある名前ですね？

さらだ：われわれがやってきた「ドラマファクトリー」の1年目、シーズンいろいろやった中の1年目の…。

東海林：ファーストシーズン？

さらだ：その1年目のシーズン1のグランプリというか、最優秀賞『動きの遅い熊』。

東海林：『動きの遅い熊』。

さらだ：その石原さんが、ついに…。

東海林：やっぱり、行く人は行くんだねえ。

さらだ：そうそう。だから、藤井香織さんもその後すごいことになったけど。石原さんと藤井さんはほぼ同世代というか、同じ頃に育ってきて、仲良いんですよ。そういうドラマファクトリー育ちってことでね。それで、今回は大賞はなかったんだけど、佳作三席が、要するに大賞が出なくて駄目だったっていうんじゃないかって、大賞に匹敵するのがいっぱいあるって審査員が胸ぐらをつかんで…。

東海林：喧々諤々？

さらだ：もうそれぐらいの勢いで譲り合わなかったんで。

東海林：じゃあ大賞なしで佳作なのか。なるほど。

さらだ：だから、私は、これはいいけどこれはダメだみたいな、譲らなかったんで佳作三作となったという、すごい拮抗した話。特にその第一席で『夕暮れ迷子』ということで、石原さんも、だからこれでオンエアされて、またどんどん、どんどん発展して行って、本当に楽しみです。あ、「ドラマファクトリー」から出てきた人が、こういうふうに育ってきたといたら、ママとしてはうれしいわ。

東海林：「カフェラテ」出身者？

さらだ：そうそう。そういうふうに私たちは言おうかな、なんて思ってます。

東海林：はい。そうですね。

さらだ：はい、そして次は特集。これも素晴らしいよ。「シナリオ作家の金言、名言集」。シナリオ創作の要点ということで、1979年の創刊以来、掲載して

きたシナリオ作家のインタビューや創作上、心がけていることとか、作家志望者へのアドバイスについての発言を抜粋して再掲載すると。「カフェラテ」でも今後こういうことやってみたいね。で、どんな先生からの素晴らしい名言があるかという、池田一朗先生、あの隆慶一郎先生ね、岩間芳樹先生、われわれの放送作家協会の理事長でもあった。

(00:55:00)

それから早坂暁さん、ジェームス三木さん、高橋玄洋さん、金子成人さん、西澤裕子さん、石堂淑朗さん、山田太一さん、丸山昇一さん、畑嶺明さん、このあたりの大大作家の人たちの言葉を聞けば、何か迷っている人も…。

東海林：ピンとくる。

さらだ：そう、目から鱗。これ、「カフェラテ」でもちょっと今後、東海林さん、まとめといてくださいね。

東海林：そうですね。

さらだ：はい、役に立ちます。それから、掲載の脚本がフジテレビ系4月11日の放送だった「金曜プレステージ・スペシャルドラマ」、西岡 琢也さんの稀代の悪女シリーズ『銭女』。

東海林：すごいな、このタイトル「銭女」。西岡琢也さんは「カフェラテ」にもお越しいただいてるし。

さらだ：西岡さん、関西弁で面白い。私が大好きな作家の先生です。80年代後半に、日本がバブルと呼ばれる好景気に浮かれていた頃、時代に踊らされ、銀行・証券会社を騙し続けて2兆円もの借金をした料亭の女将と、女将を裏で操る女、この2人が互いにいろいろやる女同士のサスペンスドラマ。

東海林：うーん。2人の女のサスペンスドラマね。

さらだ：これ、実際に起きた事件にちょっとインスパイアされて作った西岡琢也さんのオリジナル作品です。

東海林：なるほどね。

さらだ：これ、ちょっと読みたがるんじゃないの？ 女と女の闘いみたいなのが、どんなふうになるのかな。

東海林：いや、でも闘いじゃなくて、これは一緒に…。

さらだ：でも、裏で操ってたんだって。

東海林：操ってたんだ？ どうなんだろうね？

さらだ：だから、まあなんていうの、傀儡みたいな？

東海林：楽しみですね。

さらだ：だから、よくあるじゃないですか？ そういう、ギャングのドラマみたいな、一緒にやってるようで実は…みたいな。私、見てないからあれだけでもね。これ読んだら面白そう。でもやっぱり悪女だからねえ？ いやスカッとする

と思いますよ。

東海林：すごく楽しみですね。

さらだ：ぜひぜひ。このほかにも旬のドラマ作品の脚本がございますので、これもしっかり読んで、この5月号、勉強になると思います。

東海林：以上、「月刊ドラマ」2014年5月号のお知らせでした。

東海林：はい。今夜は脚本家で映画監督の池端俊策さんにお話を伺いました。面白かったですね。

さらだ：そう。でもすごく優しい方でした。大御所なのにね。なんか親しくお話をしてくださったし、とても温厚な感じですよ。

東海林：今村さんの映画学校の生徒を、日芸落ちた人から集めるという話も…。

さらだ：そうそう、麻雀屋さんで集めちゃったね。こういうエピソード、それだけでもなんかドラマチックですよ。

東海林：ということで、日芸落ちても今村さんの映画学校があったぞって言って、今の映画界で活躍してらっしゃる方も、

さらだ：たくさんいらっしゃるんでしょうね。まあそこがダメでも、池端さんの所へ持っていけば何かあるかも…。

東海林：そうですね。頑張ってください。

さらだ：はい、頑張ろうと思います、明日から。

東海林：はい。今夜もそろそろ閉店のお時間です。お相手はマスターの東海林桂と、

さらだ：ママのさらだたまこでした。

東海林：それでは、また来週。

さらだ：さようなら。この番組は日本放送作家協会の製作協力でお送りしました。

(00:58:49)